

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01137

研究課題名(和文) 授業における子どもの内面過程の把握にもとづく授業改善・授業力向上システムの開発

研究課題名(英文) Development of a system for improving lessons and teaching skills based on an understanding of children's internal processes in the classroom

研究代表者

渡邊 和志 (Watanabe, Kazushi)

大分大学・教育学部・客員研究員

研究者番号：30793476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：授業における子どもの内面過程を把握する方法に、筆者らが開発した「再生刺激法」がある。これを使って、学校現場で活用可能な研究を行い、「再生刺激法ver.2」を開発した。このことにより、これまで困難だった子どもの内面把握にもとづく授業研究(一単位時間)が可能になった。さらに、日々の授業における教師の授業スタイルと子どもの内面を調査分析した。その結果、授業改善、教師の授業力向上に活かす手がかりが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「再生刺激法ver.2」の開発により、それまで学校現場で一般的に行われていた授業研究(一単位時間)では困難だった子どもの内面把握が可能になり、子どもの内面にもとづく授業研究ができるようになった。また、授業における教師の授業スタイルと子どもの内面の調査・分析結果から、授業改善を要する授業場面や授業内容が明らかになった。このことから、授業のどこを、どのように改善すればよいかといった具体的な改善の手がかりを得ることができ、より効果的な授業改善や教師の授業力向上が可能になった。

研究成果の概要(英文)：The authors have developed the “Stimulated Recall” as a method for understanding children's internal processes in the classroom. Using this, we conducted research that could be utilized in school settings and developed the “Stimulated Recall version2.” This made it possible to conduct a lesson observation(one credit hour) based on an understanding of the children's inner world, which had earlier been difficult. Furthermore, we surveyed and analyzed the teaching style and the children's internal aspects in their daily classes. Consequently, elements for improving classes and teaching skills were identified.

研究分野：教育工学

キーワード：授業 授業研究 授業改善 教師教育

1. 研究開始当初の背景

これまでの授業研究は、主として授業における子どもから表出された限られた手がかり(発言、子どもの表情等)をもとに行われていた。これは、授業中における子ども一人一人の内面の把握が困難であったためである。このことに関連し、筆者らは授業における子どもの内面把握の重要性に早くから着目し、「再生刺激法」を開発した。なお、この方法は授業を録画し、授業後にキーとなる授業場面を子どもに見せ、思ったり考えていたりしていたことの報告を求めるものである。この方法の問題点としては、質問紙調査法によるため、調査後の結果分析に時間がかかり、学校現場での活用が難しいことがあげられる。

さらに、学校教育の目的が、これまでの知識理解の重視から子どもの自己概念や自己理解の重視へと大きくシフトし、教師が一方向的に進める授業ではなく、教師と子どもの相互理解に立った授業が求められるようになった。そのために、子どもの内面の把握は不可欠であり、このことが明らかになると、授業改善や教師の授業力向上に大きく寄与することが期待された。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の2つである。

(1) 「再生刺激法」の学校現場で活用可能な方法の開発(「再生刺激法 ver.2」)を行い、一単位時間の授業研究に活用する。

(2) 日々の授業で気づかないままにルーチン化している教師の授業スタイルと子どもの内面を授業過程における「自己省察」をもとに比較・検討し、授業研究に活用する。

3. 研究の方法

(1) 「再生刺激法 ver.2」の開発と活用

「再生刺激法」による報告内容を維持しつつ、実施時間、分析時間の効率化を図るため、次の方法を実施・検討した。

「録画の再生視聴」段階における動画(ビデオ)と静止画(写真)での報告内容の比較・検討
 質問紙調査法と2種類のマークシートによる実施時間、報告内容の比較・検討
 開発した「再生刺激法 ver.2」を授業研究で用いた場合(図1)の有効性の検討

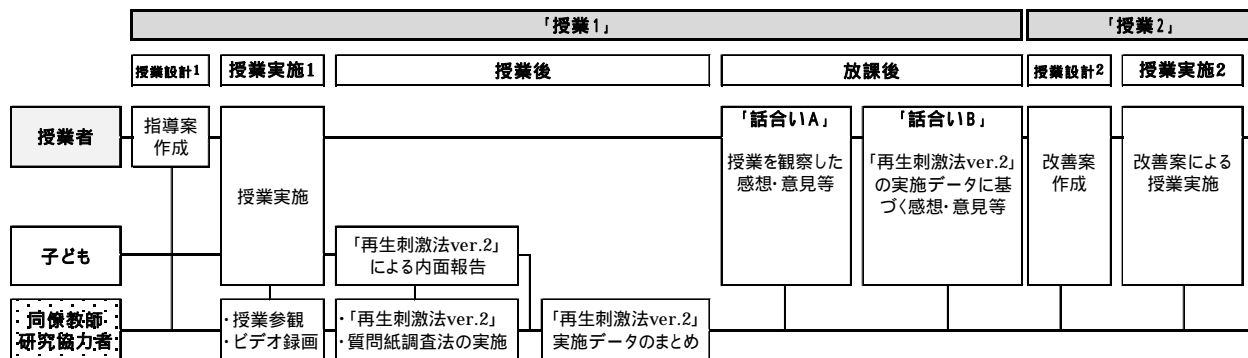


図1 授業研究の手続き

(2) 教師の授業スタイルと子どもの内面の分析と活用

質問紙調査法により得られた、授業における教師と子どもの「自己省察」の結果を分析・検討した。

質問紙の開発(教師用と児童生徒用の2種類 それぞれ質問項目45個)

質問紙の内容の検討(小学校10校 校長・教頭等の現職教員54名)

質問紙による調査実施(小学校30校:教師360名、児童533名 中学校7校:教師135名、生徒504名)

小学校教師と中学校教師、小学校児童と中学校生徒、小学校教師と児童、中学校教師と生徒、教職経験年数の異なる教師の「自己省察」の比較分析・検討

4. 研究成果

(1) 「再生刺激法 ver.2」の開発と活用

これまでの「再生刺激法」における「録画の再生視聴」の段階を授業の動画と静止画で比較したところ、動画は、「質問のねらいに合った報告内容」「思い出しやすさ」において静止画より優れていた。また、2種類のマークシートを使い、「理解に関する報告」「興味に関する報告」「思

考に関する報告」の観点から比較・検討したところ、「選択肢は少ないが、一部に詳しい記述を求めるマークシート」が適していることがわかった。これらのことから、質問紙を使った「再生刺激法」から、マークシートを使った「再生刺激法」(「再生刺激法 ver.2」)で実施可能なことが明らかになった。

「再生刺激法 ver.2」を使って授業分析を行った場合、これまでの「再生刺激法」と比較し、分析処理時間が大幅に短縮できた。このことから、授業を実施したその日のうちに、分析結果を提供することができるようになった。具体的には、授業後の「録画の再生視聴」から「報告内容の分析」まで、2時間程度で分析が完了できることが明らかになった。

授業後に KJ 法を使った話合いと「再生刺激法 ver.2」の分析結果を使った話合いで、両者の内容を比較した。その結果、前者は、「指導方法に関わる内容」が多く、内容も多岐にわたっていた。一方後者は、子どもの「学習に関わる内容」が多く、授業改善・再設計に直接関係する内容が報告された。このことは、これまでの授業研究が、P-D-C-A サイクルの C(check)の段階で終わってしまっている状況から、さらに A(action)の段階へ進展する可能性が示された。

小学校の3人の教師が実施した理科授業を「再生刺激法 ver.2」を使って調査し、得られた子どもの内面報告のデータをもとに、「再生刺激法 ver.2」の授業研究ツールとしての有効性と可能性を検討した。その結果、「授業改善ツールとしての活用」「授業力量形成ツールとしての活用」「学問的研究ツールとしての活用」が可能になったことが明らかになった。

(2) 教師の授業スタイルと子どもの内面の分析と活用

小学校の教師と中学校の教師、児童と生徒、教師と児童、教師と生徒における、「自己省察」の有意差を調べることにより、有意差がある授業過程の場所や内容を明らかにすることができた。

「自己省察」による両者の違いと特徴から課題が明確になり、いつ、どこを、どのように授業改善すればよいか、改善の具現化が可能になった。また、解決の方法についても個人、同僚、学校全体といったといった解決の所在と対応が明確になった。さらに、解決のための時間の効率化だけでなく、解決に向けた教師同士の実践の共有化も可能になり、授業改善が一層進むことが示された。

教職経験年数が10年未満の教師は、10年以上を経験する教師に比べて、有意差がある項目の平均値が低い傾向がみられた。また、10年以上を経験する教師同士の有意差はほとんどなかった。このことから10年目までの教師の力量形成が重要であることが明らかになった。また、教職経験年数に有意差がなく、平均値が低い項目もみられたことから、教職経験年数と教師の授業力は必ずしも一致していないことが明らかになった。

「自己省察」をととした授業改善は、校内だけでなく、近隣校同士、校種の異なる学校同士で実施することにより、授業改善の具現化がいっそう進むことが考えられる。本調査の活用は、中1ギャップ、不登校などの課題解決への有効な手がかりになることが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡邊和志 吉崎静夫	4. 巻 41-1
2. 論文標題 授業研究のツールとしての「再生刺激法ver.2」の活用に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 107-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊和志 吉崎静夫	4. 巻 41-2
2. 論文標題 教師及び学習者の授業認識の差異に基づく授業改善 - 質問紙調査法による「自己省察」をとおして -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 255-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊和志 吉崎静夫	4. 巻 40-1
2. 論文標題 授業における子どもの内面過程の把握のための「再生刺激法ver.2」の方法開発に関する研究-学校現場での授業改善ツールとしての活用をめざして-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 167-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊和志 吉崎静夫
2. 発表標題 授業における子どもの内面過程の把握のための「再生刺激法ver.2」の活用に関する研究
3. 学会等名 日本教育工学会2020年春季全国大会(第36回)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊和志 吉崎静夫
2. 発表標題 授業における子どもの内面過程の把握のための「再生刺激法ver.2」の方法開発に関する研究
3. 学会等名 日本教育工学会全国大会（第34回）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山顕士 村上尚宣 渡邊和志
2. 発表標題 授業研究活性化のための再生刺激法の活用
3. 学会等名 全日本教育工学研究協議会全国大会（第44回）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 渡邊和志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 205
3. 書名 子どもの内面からつくる授業 - 学ぶよるこびをランドセルの中にー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	吉崎 静夫 (Yoshizaki Shizuo) (20116130)	日本女子大学・人間社会学部・名誉教授 (32670)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------